

- 二つの事柄について:礼拝と悔い改め
- この第1章では我々の本当の姿を如実に描いている。
- イザヤは良き使信 (Good news) を語る前に、先ずは悪い使信 (Bad news) を語る。それは神さまの裁きの御手に自らの身を置く時にこそ真の救いが可能となるということ。このことをイザヤは伝えようとしている。
- 我々の問題とは何か? 1:2と 66:24→問題は神さまに対する「背き」だという。しかし、そのような我々を救おうとされる。
- 今朝のこの箇所は四つの部分に分けられる:神さまからの責めたて(10節)、告発(11-15節)、招き(16-18節)、そして決断(19-20節)。
  - 神さまからの責めたて(10節)
  - 告発(11-15節):
    - ◇ そもそも礼拝とは何か?
    - ◇ 15節=礼拝の姿。手を伸ばす。手は血まみれ。
      - ヘブライ語の表現=「手を満たす」→「祭司職に任命する」という意味(出 28:41; 29:9; 30:30; 40:15)
    - ◇ しかし、このような描写を聴いても、我々にはピンと来ないかもしれない。私の手は「血まみれ」?殺人犯でもないし、そんな血まみれだなんて、それはいくら何でも言い過ぎではと思ってしまう。
      - 主イエスさまの言葉に照らし合わせてみると我々の本当の姿というのが見えてくるかもしれない。マタイ 5:21-24; 「隔ての壁である敵意」(エペソ 2:14)という表現; ヨハネの手紙第一 3:15, 17
    - ◇ 神さまはなぜここまで率直に語られるのか。なぜここまでぶっきらぼうというか、厳しい言葉を語られるのか。理由:神さまは我々を救いたいと思ったださっているから。神さまは救われる神だから。そこで、恵みの招きを我々にくださる。
  - 招き(16-18節):ここにはシンプルな命令的な招きが書かれている。
    - ◇ 三つの解決法(16節):洗え。身を清めよ。悪い行いを取り除け。
    - ◇ 三つのチェンジ(16d-17節):やめよ。習え。(公正を)求めよ。
      - バシレイオスの例
      - 「洗い清め」て「来なさい」:この二つが大切な呼びかけ。神さまの恵みの招きである。(18節)。
      - 詩篇 51 篇にあったようなオープンさと正直さを神さまは求めておられる。
  - 決断(19-20節):
    - ◇ 神さまは我々から正直なオープンな決断を求められる。そのためには自らの頑なさを捨てなくてはならない。そうでないいつまでも神さまの仰っていることが理解できない。
- 「聞け…主のことばを」で始まり(10節)、「主は言われる」と二回繰り返され(11, 18節)、最後に「主の御口がそう語られる」(20節)とある。私たちの主はこのように私たちに語り続けてくださるお方である。どこまでも罪深い私たちだけれども、そのような私たちを諦めることなく、見捨てることなく、今でも立ち返りなさいと手を伸ばし語り続けてくださる。ご自身の恵みをもって我々を招き続けてくださっているお方である。その招きに我々はどうかどう応答すべきなのだろうか。砕かれた霊、砕かれた心をもって、我々に対して語り手を伸ばし続けてくださっているこのお方の元に自身を委ねて今週も歩ませていただきましょう。